
一夏が主人公？いいえ、ヒロインです

御根通久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一夏が主人公? いいえ、ヒロインです

【NNコード】

N8338Y

【作者名】

御根通久

【あらすじ】

篠ノ之篠は半改造人間である、幼少の頃束の才能を妬んだ者により、瀕死の重傷を負わされた。そんな時一人の謎の男が束に二つの石を差し出し、その石を用いて篠は死ぬことはなかった。そして、篠の特異性をごまかすためだけに束はISを開発し、その能力を見せつけ、妹の特異をごまかすことに成功させた。これは、理不尽な現象を引き起こすようになった篠の一夏にとつてのヒーローとなる物語である

第一話（前書き）

いい加減風呂敷を広げようとしないでとつと他の小説を書き上げたほうがいいと分かっているんですけど、書き上がってしまったので投稿します………… 篠さんの性格、改变しており主人公です……ついでに改变要素多いけど、一巻相当分終わった頃にまとめを出します、それではどうぞ！

第一話

「えー……えっと……織村一夏です……よろしくお願ひします」

私を除く女子の視線が、自己紹介したかつての幼馴染の少年である織村一夏に集中していた。

それだけの紹介で座る「」と思っていたらしいのだが、女子たちの視線はそれを許すことには

なかつたらしい、見事に続きを期待する視線にやられ、困惑しながら私は視線を送つて

きていた……なぜか真後ろの席に配置されているのだが、これは学園側が少しでも心を

軽くするように古い「」を近くに置いておいたりする
処置なのだろうか？

それはともかくとして、当然ながら紹介を助けることなど出来
る訳がないので、

目線だけで自分でじうにかしりと突き放した……それだけで理解し
たのか一夏は

見た目では判断不可だが落ち込みつつも、軽く目をつむりじうにか
続きを考えていた。

そして誰も気がつかないことではあるのだが、一人の女性

織

村千冬さんがいつのまにか

教室内に入っていた……誰か気がついてもいはずなのに、と思っていると。

「以上です」

大半の女子がズッコケ、頭を思いつきり机に叩きつけてしまった者もいる。

見事なリアクションだと思いながら、これから訪れるであろう一夏の不幸？を感じ取り、

一夏に覚悟だけはしておけという視線だけを送っていた。

その視線を受け止めた一夏は不思議そうにしていたが　　直後に
教室中に響きわたった

音の元である打撃を受けて意味を理解したようだった。

そして、おそるおそる視線を背後に送る一夏にまた叩かれるんだろうな、という未来を

予知できた。

「げえー！ 関羽ーーー？」

「誰が三国志の英雄かバカ者」

また教室にスパーーンといつ聞いていて清々しいほどの音を発生させる打撃が一夏の頭に

叩き込まれてしまつた…………田の前でうずくまる幼馴染の姿に痛そ
うだなという哀れみの

視線を送つていると教えてくれよと視線で睨まれた。

確かに脳細胞はかなり死んでしまつたが、それでも死に至ることはないのだし、

女子たちの期待を裏切つたのだから甘んじて受け入れて、と視線で返して一夏は渋々と

視線を叩いてきたぬしへと向けたが、今度は驚愕していた。

一夏にはあまり見せない優しい表情を向けていたからである……か
くいう私も昔ですら

見ることがなかつた表情に少々啞然としていたが。

「諸君、私が織村千冬だ。君たち新人を一年間で使い物となる操
縦者に仕立て上げるのが

私の仕事だ。私の言ひことを聞き理解し、理解しない場合には理解できるまで

教えこんでやる。逆らつても構わないが、私の言ひことだけは聞け、いいな

ものすごい暴力宣言である、しばりへ見ないうつに変わってしまつたのだろうか、と

軽く悩ませていると、一夏の方からボソリと「間違いなく千冬姉だ」と聞こえてきた。

実は昔の頃からああいつ性格だったのか、と若干遠い目をしておいた。

が、その思考はわりとすぐに破壊しつぶされる事となる。……ある程度知つていたことでは

あるのだが、少々諷めでいたようである。

キヤアアアアアー！本物の千冬さまよーーーー

一セモノなんか居たのか、それは初耳だ それ以前につるるくてかなわないでの

もう少ししじだけ声量を絞つて欲しい。……無駄に耳が良いせいだ常人よ

りは煩く聞こえてしまつので

耳をふさいでも鼓膜が破壊されるかと思うのだから。

ずっと、ファンでした！…もちろんこれからも…！

私もお姉さまに憧れて日本語を覚えてブラジルから来ました！

！

ものすごく流暢な日本語だな……姿を見なれば十分に日本人として名乗つていけるぞ。

だからもう少しだけ声量を（‘‘）

私！お姉さまのためでしたら命を捨てれます…！

ちらりと視線を送つて見たのだが目が真剣そのものだつた……正直怖い、私が対象でなくて

よかつたと安堵するが相変わらず「うそ」といので声量（‘‘）

「……毎年毎年、よくもこれだけのバカ者を集めることができるものだ。私のクラスだけ

集まるように手配しているのか、鬱陶しい

その発言に教室中が一瞬だけ静まり返った。

その様子に私は安堵し、千冬さんの人気は下がつただろううが正直助かつたと思ったのも

つかの間 一回安堵したためその後の反応に若干遅れてしまつた。

きやああ、もつと罵ののつて……！

でも、時には優しくして……！

でも調子に乗らないように躊躇して……！

姉さん、助けてくださいこの教室は変態だらけだと考えたと

ころでそういうえばあの人も

割と変態の部類だつたと思い出しへ軽く絶望していた。

私を助けるためのカモフラージュのために大々的に今の状況を作り上げて専用EIS（笑）を

送り込んできて感謝はしているのだが、私が20までに誰かと結ば

れない」とか「嫁にも、ひつ

発言をするほどの変態だった 旦那なんだといつ

今思って出してもなんで姉さんが

疑問がわくが、今は割と関係がないな。

「で、血口紹介も満足にできないのか」

「いやだつてち

織村先生」

なんとなく嫌な予感がしたので一夏の机の上に千冬×織村先生〇〇と書いた紙を素早く

置いて、それに気がついた一夏が慌てて訂正し出した また叩かれるところを

なんとか救出して一仕事を終えた私は軽くかいでもないが額の汗を拭き取る仕草をする。

出席簿を構えていたから一夏が（世と変わてなければ）いつものよつな感覚で呼んで

しまえば確實に降りおひそれていよい音が響きわたっていたことだらう。

一夏の脳細胞はほんの少しだけだらうが確實に押されないととなつ

た。

あれ？ そういうえば織村つて姓 もしかして親戚？

でもそれにしてもそれは親しいわ もしかして姉弟じゃないかしら

想像力のたくましい女子生徒の前には私の努力など無意味であった
ようだ。

いや、分かってはいたのだが、千冬さんが他のものとは明らか
に違う扱いを

解釈の仕方を変えれば親しきように感じ取れるであろうと……言つ
ても否定するだらうが、

手がかかるときに千冬さん自身が諫めようとすると確実に笑みを浮
かべているのだ。

親しいものに対するのみ見せるのだと周りに指し示すかのように、
気がつかないのは本人と

それを受ける一夏だけである。

もしかして 三人のうちの一人なのもそれが関係してゐるの
かしら

「J」でよひやく補足するが、この「J」は「J」学園 正式名称である「インフィーチ」

・ストラトス」の略称である「J・S」といつばの「宇宙」で活動することを想定して作られた

マルチスーシフォームであるものを扱う為の養成を目的とした学園である。

一般的に原理は解明できとはいひのだが、この「J」は女性でしか扱えないという男にとっては

欠点でしかない特徴があり、女尊男卑の世の中になつた原因 それの大元の原因である

私には後ろめたいことだが、この点についてはまた機会があれば説明が入るだらう である。

が、最近となり三人ほどそのルールを無視して「J」を起動させた男たちがおり、その特異性から

三人ともこの学園へと強制転入することとなつた。

このことが知られたままで過ごしてしまえば間違いなくマッドな方々や男尊復権の方々が

大喜びで解剖して調べようとするだらう。

好奇心は猫をも殺すといったが、この女子にだけせりざれる環境に來たことでその事を深く

実感しているに違いない とはいえ一夏達は悪くはない、普通女性しか動かせないものを

男が動かせると思えないけど見かけた記念に触つてみよつかなと思う人間など世界中に

数多くいるのだから。

いいなー。変わつて欲しいなー

羨ましい

その言葉が一夏に深く突き刺さつっていたのだが、なぜか私の方を一瞬だけ見て、続いて

千冬さんの顔を見てから思いつきり首を振つていた。

このシステムめ、そのポジションだけは誰にも譲らない気なのか
あれ？私の顔を

見たのは一体なぜだ？ ああ、そうか私だけが一夏に好奇心の
目を向けてないから

精神的な癒しを求めていただけなのだろう。

おつと、自己紹介がいつの間にか再開していた、危うく自分の出番で慌てるところだった。

「篠ノ之篠だ、特技・趣味は剣道。これから一年よろしく頼む」

そのあとも淡々と自己紹介が進む。まあ、特に意識するよいつなものじゃないし とはいえ

大半が一夏に対するアピールのものが多いな、一夏のやつが困っているが助け舟など出せない。

せめてもの情けとしてお前の真後ろ以降の視線は私がなんとか遮断してやるから勘弁してくれ。

「イギリス代表候補生のセシリ亞・オルコットですわ趣味は

「

一夏はとつぶして聞いていなかつたが、私はしつかりと聞いていた
代表候補生か、

かなり優秀なのだろうな とはいへ一夏に対しても見下すような視線を送つていいことだけは

いただけないことである、気がついていないからいいものの、男子でIS使いなのだから

女尊男卑はあまり意味をなさないのは分かっているのだろうか？

まあ、それ以前に代表候補生としての品位に泥を塗つてているような気がするが、今のところは

あまり害はないだろうと自分に言い聞かせて軽く無視しておく
そうしてすべての生徒が

自己紹介を終えたところで時計の方を見ると結構いい時間だった。

「さて、SHRも終わりだ。諸君らにはこれから半月でEISの基礎を覚えてもらいつ。

そのあとに実習に入るのだが、基本動作は半月で覚え込ませろ。
いいかよからうが、

悪かろうが返事をしろ。私の言葉には確實に返答しておけ」

なんという鬼教官なのだろうか まるで悪魔だと思ったが、悪魔はまだ人間じゃないから

いいほうであり、千冬さんは人間の限界を知っている分タチが悪い
であろう 目の前で

一夏がそつそつぶやいていたからきっとそうなのだろう。

それならば私の扱いはどうなるのか甚だ疑問である、人間と

みなして教えるのか、

人間以外として教えるのか
姉が私の命を救うために

怪しい人間から受け取った謎の一いつの石を心臓に移植して改造された半改造人間である。

心臓と身体能力以外では人間だと言いはれ
の部分も人外か、一応
変身できるからそ

ISの一種であると姉がごまかしているのだが
人間扱いを
真実を知つて

してくれそうなのが一夏と千冬さんと姉と両親だけだらう。

「そろそろ座れバカ者」

一夏、まだ立ちっぱなしだったのか、気がつかなくてすま
ない。

そしてさよつなら数多くの脳細胞たちよ。

言い忘れたが私はとある理由で

第一話（後書き）

不定期更新…………他のをいそいで書かなきやいけないとわかつているのに浮気してしまつ。orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8338y/>

一夏が主人公？いいえ、ヒロインです

2011年11月24日21時52分発行